

## 協同集会の準備に関して

坂林 哲雄（協同総合研究所専務理事）

今回の集会の特徴を一言であらわすと「市民運動の中に協同（労働者協同組合・高齢者協同組合）の広がりを示し得た」ことではないかと思う。そのことが198という参加組織数に反映している。組織的な参加も多かったが、市民運動に参加する一人一人の個人がそれぞれの立場から参加意識を明らかにして集会に集ったように思う。レポートを求めた参加組織は勿論のことだが、勉強したい、聞いてみたい、自分も発言したいと意欲あふれる参加者も多く、分科会によっては時間が不足するところも続出した。総括会議の席では「労協主催の市民派集会」（石見）という表現も飛び出した。記念講演をして頂いた井上ひさしさんも「人の持つ個性の多様性」ということを強調されていた。この集会のために来てくれたAARPのパーキンスさんも「互いの存在を尊重したパートナーシップ」ということを話されている。組織を越えた人の出会いがあったということだと思う。労協自身も協同集会の取組みを通じて自己変革を遂げつつあるのだろう。既にその契機は東京の高齢者協同組合設立にあらわれていたし、東京高齢協と協同集会の取組に学ぶことが、いま労働者協同組合の全国方針ともなっている。

準備を1年前から始め、各県毎に「協同」の広がりをつくる活動を行ってきた。その中で実感できたことは、労働者協同組合、高齢者協同組合が提起しめざして行こうとする方向は多くの市民と深く共感できることであった。秋田が火付け役となり実行委員会が丁寧に行われ、福祉や農業といった分野での新たな広がりをつくった。センター事業団との提携では仕事の広がりも生まれた。山

形や岩手、福島でも新しい出会いが多数生まれた。文化を柱とした奥会津での活動、環境保全型農業の育成や顔の見える関係を目指した産直の取組、高齢社会を主体として豊かなものにしようという人々との出会い。福祉と環境をテーマに取組む共同作業所との出会いなど、東北での仕事づくり地域おこしの活動は、実行委員会の耳目を開かせてくれた。東北の中で活動する市民組織の強さを強烈に感じ、メインスローガンを大きく変更することにもなった。個人としても魅力あふれる人々とのネットワークが広がった。井上ひさしさんもその一人。「普段なら会えないような人と出会えた」「日常の仕事に埋没していて見えていなかったことを感じた」といったような感想も出された。

宮城での市民運動との出会いと深まりは今回の協同集会の大きな成果であると同時にこれからの協同集会の方向を決めることになったように思う。市民運動は全国的に飛躍的な広がりを見せているが仙台はその中心地の一つ。2年前に松島医療生協との間で生まれたセンター事業団の仕事が縁で農業団体や市民運動との出会いがあった。今回は「協同集会」を舞台にそのつながりを更に大きく広げることができた。「シニアネット仙台」を始めとする高齢者社会に挑戦する多くの組織、女性たちが中心になって進める事業や福祉活動、地域社会を良くするために自分のやりたいことを自分らしく演じている人たち。こういった人たちとの出会いが協同集会の企画を豊かなものにしていった。分科会の企画も広がり深まりを生み出した。手作り企画の交流会は、「おひさまや」「菜

の花村」をはじめとした食と農にこだわる人々との出会いや協力がなければ絶対にできなかった。このつながりをこれからどうするのか。大きな嬉しい課題が残っている。青森、秋田、岩手、山形、福島、宮城で、それぞれ関わっただけの成果が残されたと思う。その成果をどうつなげ発展させてゆくのか。秋田で協同集会在準備されていることは一つの成果として大変うれしい。仙台では「今回の成果を地元で継承しなければ」とセンター事業団で働く若者が活動を始めている。出会いを広げ、高齢者協同組合や労働者協同組合を伝える場としては最高の取組である。花火のように打ち上げられるだけでなく、継続性と広がりをもった運動として定着させることは研究所も含めた課題の一つだと思っている。研究テーマとしても多くの素材を発掘することができた。すべてを汲み尽くす意気込みで出会った実践事例を丁寧に調査研究したいと思う。

事務局スタッフの徹夜のがんばりや仙台事業団の人たちの組織問題を抱えながらの行動、仕事のやりくりをつけながら協同集会の参加要請に取組んだ多くの人の努力・協力の上に今回の協同集会有ったことを確認しておきたい。井上ひさしさん、パーキンスさんには忙しい中講演を引き受けていただいた。集会の企画を一層豊かにして頂いたことに感謝したい。

多くの出会いの一方では困難な事態も抱えていた。従来の運動のあり方に固執するいくつかの組織・個人からは誤解と無知からくる非協力・妨害に近いことまであった。創造的にものを考え生み出すことのできない組織人の限界である。組織の中に埋没する個人であってはいけないということも今回の取組を通じて感じたことである。「協同」の持つ素晴らしさを今後も組織を越えて一人一人に伝えていく必要がある。

実行委員会を1年前に立ち上げたが、実行委員会として十分な広がりが生み出せなかった。また、実行委員会で分科会のねらいや報告者など十分に議論が尽くせなかったことも反省される。事務局からの問題提起や活動の資料が遅れたり不足

していたりといったことも原因である。しかし根本的には、直前まで東北の「協同」の活動を十分に把握できていなかったことである。従って、実行委員会の呼掛けは、まずそれを知ることから始めないといけなかった。具体的な内容を決めることが終盤までできなかった。実行委員会呼び掛けまでの準備期間をどう使うのかということが今回の課題である。最終的には実行委員会で決めるにしても集会の目的、規模、予算、実行委員の役割などは決めて臨まないといけないうように感じている。全体集会や分科会、レセプションの企画運営に地元の市民組織で活躍する多数の人々に加わって頂いた。このことが協同集会の運営を考える上で随分勉強になった。これだけの規模の集会を企画し準備するためにはそれなりのシステムが必要である。全体的な準備の遅れを招き、結果として集会当日まで多くの混乱を持ち込むことになった。集会参加者全体からは高い評価を得ることが出来たのだが、その舞台裏は綱渡りの連続であった。今回の経験は次回に必ず引き継がれないといけない。又、実行委員会の運営は「労協主催の協同集會」というやり方に安住していたように思う。協同集會が、その目的に共感する多くの組織・個人の参加で練りあげられる集會であれば、そういう人々の力をもっと生かしてもらえるような実行委員会の有り様が求められている。この点は次回に引き継ぎ考えるべきテーマとして残った感じである。その他にも手話通訳の常設や保育の必要性などが求められた。もっと映像を利用する工夫が必要だという指摘もあった継続性のある集會として確実に成果を積み上げていきたい。